

京人形を潔しむための鑑賞ガイド

# 雛まつり 人形

雛まつりのはじまり

雛人形を飾って女子の成長を祝う雛まつりは、古くから行われているように思われがちですが、人形を飾ってこの日を祝うようになったのは、江戸時代の初めとされています。

雛まつりの起源は、上巳の節供という三月のはじめに行われた祓いの行事です。紙など簡素な素材で作られた人形は、人間の形代として穢れを引き受け、水に流されるなどして処分されていました。それがやがて、同じく三月三日頃に公家の女子たちが行っていた盛大なお人形遊びである雛遊びと結びつき、江戸時代には、飾るための豪華な雛人形へと変化していきました。

江戸時代の雛人形には、その時代の元号を冠して呼ばれる寛永雛・享保雛や、製作した人形師の名を付けたという次郎左衛門雛、江戸で完成した古今雛、公家の装束を正しく写した有職雛などがあります。各種の雛人形が勢ぞろいするこのたびの展示では、面差し、手の動き、装束など、それぞれに異なる細部に注目しながら、雛人形の変遷をお楽しみください。



特集陳列 雛まつりと人形

2017年2月18日(土) — 3月20日(月・祝)

平成知新館 特別展示室(1F-2)

## 古今雛の周辺

江戸時代の雛人形は、寛永雛・享保雛・次郎左衛門雛・古今雛・有職雛というように、分類整理して紹介されることが多いのですが、実際には、どれに分類して良いものか、明確には定めがたい雛人形もあります。

とりわけ定義しがたいのが、古今雛です。「古今雛」という名前は、安永年間の日記に江戸の雛市で売買されていたことが記録されているので、後世に名づけられたものではありません。京風を脱して江戸で流行した雛人形で、名工・二代原舟月が大成した人形とされています。江戸での人気をうけて上方でも古今雛にならった人形が製作され、その影響は現代の雛人形にも及んでいると紹介されるのが一般的です。

それでは、古今雛の外見上の特徴はどこにあるのでしょうか。さまざまな作品を見ていくと、すべてに共通する特徴を挙げることは難しいことに思い至ります。一般的には、①瞳にガラス玉を入れる玉眼が採用されはじめること、②男雛の装束が実際の公家装束に忠実になっていくこと、③女雛の装束が公家装束にならってはいるものの、袖口に豪華な刺繍を入れるなど華やかさを志向すること、の三点が共通項目とされているようです。ただこのうち、上方製の雛人形においては、描き目が主流であったため①の特徴はほとんど見ることができません。

京都国立博物館の雛人形には、一部に古今雛の影響が認められるものの、古今雛と分類するにはとまどいを覚える作例がかなりの数あります。このような作例が存在するのは、これらの人形の多くが上方で製作されたからに違いありません。伝統を尊ぶ上方では、享保雛や次郎左衛門雛など、前代から製作されてきた雛人形の要素を受け継ぎつつ、流行を加味した雛人形が求められたのでしよう。



▲女雛の袖口



▲男雛の描き目

享保雛風古今雛 岡村佳子氏寄贈 京都国立博物館蔵  
享保雛風の男雛に古今雛風の女雛が組み合わされた雛人形です。

## 男雛と女雛

―右と左の不思議―

男雛と女雛の正しい並べ方はよく話題になりますが、左右両説とも根拠があり、どちらが正しいとは言えないようです。

内裏雛は、天皇と皇后の姿がお手本ですから、伝統的な宮中の席次に従えば、向かって右は男雛、左は女雛となります。そのため、伝統を重んじる関西地方では、現在でもこの並べ方が主流です。

しかし、明治時代を迎え、宮中に西洋式の儀礼が導入されると、男女の占める位置が逆になりました。そのため、現在の皇室の規定に従えば、向かって右は女雛、左は男雛となります。一説には、昭和天皇の即位式の際に撮影された写真を参考に、東京の人形業界が雛人形の左右を置き換えたことに端を発し、この並べ方が関東を中心に広まったと言われています。



## 次郎左衛門雛 じろざえもんびな

京都の人形師・雛屋次郎左衛門がつくり始めたとき、丸顔に引目・かぎ鼻・おちょぼ口のおっとりした面貌の雛人形。18世紀後半には製作されていたようです。大名家や、公家の子女らが入寺する門跡尼寺に伝えられる作品もあります。



次郎左衛門雛 入江波光コレクション 入江西一郎氏寄贈 京都国立博物館蔵

## 古今雛 こきんびな

江戸の名工、二代目・原舟月が大成したとき、現在の雛人形の原形。安永年間（1772～81）からつくられ始め、江戸での流行を受けて上方でも製作されるようになりました。実際の公家装束にならうものの、女雛の袖口に刺繍を加えるなど、より豪華に仕立てられています。主に町方で飾られました。



古式古今雛 玉城芳江氏寄贈 京都国立博物館蔵

## 有職雛 ゆうそくびな

装束に明るい公家の監修のもと、公家や武家のために製作された特別注文の雛人形。有職とは、宮中にまつわる伝統的な儀式や行事にともなう知識をいいます。髪型・装束の色目・文様など、忠実に公家の装束を再現しようとするのが特徴です。



有職立雛 京都国立博物館蔵

## 立雛 たちびな

三月三日に人形を飾る雛まつりの始まりとして、人間のけがれを木や紙でできた人形に移し、川や海へ流す祓いの行事があります。自立できない立雛は、けがれを移す人形から発展したと考えられ、飾ることを目的としていなかった初期の形式を伝えています。



立雛 次郎左衛門頭 京都国立博物館蔵

## さまざま な雛人形

時代とともにさまざまに変化してきた雛人形のつくりや手の動きなど、細部にご注目ください。

\*雛人形の名前については時代名は分類名称です。製作年代とは必ずしも一致しません。

### 江戸時代

[寛永年間]  
(1624～1643)

[元禄年間]  
(1688～1703)

[享保年間]  
(1716～1735)

[安永年間]  
(1772～81)

### 明治時代

## 寛永雛 かんえいびな

江戸時代前期（17世紀）の古風な雛人形。高さは10cmほどで、坐雛の初期の例のひとつです。男雛は頭と冠を一緒につくり、髪の毛と冠は墨塗り。女雛は両手を開き手先をつくらず、小袖を袴に着込めます。



寛永雛

## 古式享保雛（元禄雛） こしきょうほびな（げんろくびな）

寛永雛よりもやや大きな雛人形。男雛のつくりは寛永雛とほとんど変わりませんが、女雛には手先がつき、装束も十二単風の襲装束になります。



元禄雛 京都国立博物館蔵

## 享保雛 きょうほびな

江戸時代中期（18世紀）に町方で大流行し、その後も長くつくり続けられた雛人形。面長で端正な顔立ちで、50cmにもおよぶ大きなものもあります。毛髪は毛植になり、公家装束を模した金襴の装束を身に着けます。



享保雛 京都国立博物館蔵

## 嵯峨人形 さがにんぎょう

木彫りを基体に、衣裳の文様を胡粉で厚く盛り上げ、極彩色を施した人形。年月の経過もあって色調は重く沈んでいますが、かわいらしいだけではない深遠な表情と相まって、独特な魅力をたたえています。江戸時代を通じて製作されましたが、子どもの姿をうつした裸嵯峨、うなづくように首を振るからくりが仕組まれた首振り嵯峨が、初期のものと考えられています。



嵯峨人形 犬抱き 京都国立博物館蔵

## 京人形 きょうにんぎょう

江戸時代には、雛人形のほかに、さまざまな人形が誕生しました。その多くは、ここ京都が発祥の地と考えられています。



御所人形 獅子頭持ち  
入江波光コレクション  
入江西一郎氏寄贈 京都国立博物館蔵

## 御所人形 ごしょにんぎょう

木彫りに胡粉を塗り重ねて磨き上げ、三頭身のあどけない幼児の姿を写した人形。明治時代以前には、その白く美しい肌から白菊、あるいは白肉人形、頭の大きなところから頭大人形、扱った人形問屋の名前から伊豆蔵人形などと呼ばれていました。御所人形には「見立て」と称し、童子の姿でありながら、故事人物をあらわす一群があります。英雄や賢者に見立てた人形に、子どもの健やかな成長と栄達が重ねられたのでしょうか。



賀茂人形 稚児と童子 京都国立博物館蔵

## 賀茂人形 かもにんぎょう

柳や黄楊を素材に、顔や手足は木地を生かし、衣服には縮緬や金襴などの裂を木目込んだ人形。その技法から木目込人形とも呼ばれます。こまやかな刀さばきを見せる顔と、着衣の裂とが調和し、素朴な味わいがあります。賀茂人形の主題は多様ですが、いずれも明るく楽しい表情に満ちています。



衣裳人形 鞠遊び 入江波光コレクション  
入江西一郎氏寄贈 京都国立博物館蔵

## 衣裳人形 いしょうにんぎょう

衣裳をまとった胴体に、頭部や手先を加えた形式の人形。子どものかわいらしいしぐさを写したのものや、婦女・遊女・若衆などの風俗を写した浮世人形などがあります。浮世人形は、髪形や衣服などに往時の風俗がうかがえ、風俗史の面からも重要です。

長い年月を生きている人形には、汚れや傷みがありますが、人形の重ねた歴史の重みとしてご鑑賞ください。